

東医大誌 57(2) : 201~203, 1999

## 研究会報告

### 第42回 東京医科大学内分泌代謝研究会

日 時：平成10年12月1日（火）

PM 5:30~6:30

場 所：東京医科大学病院

本館6階 第二会議室

当番教室：内科学 第三講座

#### 1. 当科にて経験した甲状腺原発悪性リンパ腫の8例

（内科学第三講座）大木理恵子，竹内美帆，谷口 潤，大石 睦，岡田光代，石井幸司，山本浩文，酒井裕幸，本多光一，金澤真雄，能登谷洋子，代田常道，林 徹

甲状腺原発の悪性リンパ腫は、全甲状腺悪性腫瘍の1~3%を占める比較的まれな疾患である。また、その性状は他の部位に発生する場合と異なる所見が少なくない。

対象は1988年以降に当科にて診断・治療を行った甲状腺原発悪性リンパ腫8例。男性3例、女性5例、平均年齢68.5歳。8例中5例は慢性甲状腺炎にて加療あるいは経過観察されていた。

主訴は全例で甲状腺腫の急速な増大であった。

診断には問診、触診の他に甲状腺のエコー、吸引細胞診、ガリウムシンチ等を行い、確定診断はOpen biopsyによった。治療は化学療法および放射線療法を併用あるいは単独で行ったが予後は診断時のStageが大きく影響していると思われた。

【結 語】慢性甲状腺炎の患者が甲状腺腫の急速な増大を訴えた場合には悪性リンパ腫の発生を念頭においた迅速な診断が重要である。

#### 2. 不安定糖尿病における超即効型インスリン（insulin lispro）の使用経験

（八王子医療センター・内分泌代謝科）佐藤知也，野川深雪，旭 暢照，大野 敦，植木彬夫

不安定な血糖コントロールの原因として食事時間が不規則で、またインスリン注射から時間を置くことなく食事をせざるを得ないような場合がある。このような場合インスリンの血中濃度上昇前に摂食することによる高血糖、あるいは食間時間の延長による低血糖などが生じ、著しい高血糖と低血糖を繰り返す。今回、このような患者にinsulin lisproを使用する経験を得た。患者はファーストフードの店で、午前5時より深夜まで勤務することが多く食事時間は不規則であった。また食事時間を作ることが出来ず注射後直ちに、短時間で食事を摂っていた。インスリン注射は各食前に即効型、就寝時に中間型をスライディング法により行っていたが、血糖コントロール不良であった。入院にて食事時間と注射後の時間を一定にすると血糖値は安定するが、職場に復帰すると再度血糖値は上昇し低血糖症状も出現するようになった。そこで超即効型インスリンを各食前に使用したところ良好な血糖コントロールが得られた。

#### 3. 生後早期に発症したメチルマロン酸血症の1新生児例

（小児科学教室）青沼美佳，武井章人，高見 剛，熊田 篤，望月慎史，山中 岳，中島周子，鶴田敏久，宮島 祐，星加明徳

メチルマロン酸血症はメチルマロニルCoAムターゼ活性の低下による有機酸代謝異常症であり、早期発症例は予後不良といわれている。今回、交換輸血、血漿交換を積極的に施行することにより救命でき、その後の脳画像診断で興味ある所見を得た症例を経験したので報告する。

症例は、在胎38週、出生体重2624g、他院にて出生した女児。日齢3に活気低下、哺乳力低下、振戦、低カルシウム血症が認められ、当院NICUに緊急入院となった。日齢4から5に呼吸障害、意識障害が進行し、代謝性アシドーシス、高アンモニア血症を認めたため、頻回の交換輸血、血漿交換を施行した。同時に検索した尿中有機酸分析によりメチルマロン酸血症と診断した。L-カルニチン投与と分枝鎖アミノ酸除去乳に普通乳を添加し再発なく体重増加を得たが、四肢筋拘縮傾向があり、脳MRIにて脳萎縮、脳室周囲白質軟化、基底核に病変を認めた。